



ピタインダカン

(おさみがりにばし)

第 49 号

発行日 2024 年 11 月 10 日

発行人 矢代 しゐ

秋田市御野塩 7-1-29-305

鴉

初冬の朝

ゴミ袋を持ったわたしに
いたずらに騒ぎたてる
松の枝の二羽の鴉

一羽が地面に飛び降り

つかず離れず

ひよこひよこついてくる

もう一羽は高みの見物

鋭い眼は

黄色い袋から目を離さない

隙あらばと狙っている

集積小屋にゴミ袋を入れたら

観念した甲高い声が

凜とした空に散らばって消えた

母の声

新しい朝を迎えられた幸せを
母に感謝する

いつも見守ってくれる恩愛――

私は

母譲りの気概を高くもって

懸命に生きてきた

それでも

途方に暮れたときは

母の声を探していた

見えないけれど

耳底まで通る

凜とした声を

聴くことがあった

見えない声は

心の闇を静め

肉体をめぐり

明日を見出させてくれた

母の声を聴くと

遠い記憶を呼び覚ます

連綿と続いてきたDNA

母につながる私・娘・孫……

引き継ぐものは

たおやかな生き方

ぶれない判断

挑戦する魂

(おはよう

今朝も

私は遺影の母と
見えない言葉を交わす



地球

歩道に沿って

まっすぐ連なる花の毬^{*}

花びらのように見える

四枚の萼片は

球状の小花を囲み

こんもりと丸く

心を寄せる家族のように

清楚にたたずんでいる

中心に真花が密生し

周囲には大形の装飾花が並び

花火を思わせるのは

額紫陽花

優しい乙女のピンク

心静まる海色の青

ナイチンゲールの白

色みの違いは

愛でる人への

毬の思いやり

一際目を引く藤紫は

和服姿の

亡き母の色

空が黒雲に覆われ

にわかに雨が降りだした

細やかな雨の糸は

毬を濡らし

首筋を伝い

青葉に滴り

緑の雫は

深々と大地に染みてゆく

雨が上がると
雨滴の重さで
毬がかしいでいる
深い緑に浮かぶ
毬の地球^{ほし}

長く延びた歩道に
みずみずしいレース模様の
初夏の色が遊んでいる

*紫陽花

百日紅

さるすべり目隠し垣の低からず

——母の句

びっしり

家族のように集って

年輪を感じさせない

勢いが

まだ宿っている

晩秋

百日紅は

華やかさを捨てた

簡素な姿

滑らかな幹に

冬に向かう気概を秘して

しんと立っている

西の空が

頬紅をつけたように

茜色に染まりはじめた

人通りが少ない道に
さるすべり
百日紅が咲いている

花は

忘れがたい

濃いマゼンタ色

猿も滑るという

平滑な木

コブが多い

淡褐色の木には

小花が

やがて

百日紅は夕闇色に

しなやかな言葉に

一月の白い風が吹く日

教師だった

同級生を訪ねた

仏間には

まだ母親の残り香が

まつわりついたままで――

明るい観葉植物は

むすぼれた気分をときほぐすように

なめらかな曲線の触手を

彼女のほうに

そつと伸ばしている

珈琲カップからあがる

もやっとした湯気は

鬱屈した心持ちに似て

階段の両側や

部屋にも多様な本

彼女の旺盛な読書量に気圧される

おそらく

彼女は

沈滞した時間のなかでも

湿っぽくなる心に

うまく折り合いをつけているのだろう

明日も

彼女は本を読むのだろう

言葉の部屋で――

徒然のエチュード

46

①

クーラーも

扇風機も

一人占めのわたし

それでも

暑い！

かかる上は
皮を脱ぐか！

②

緑の小舟で

小鳥があそぶ

ここに

あそこに

黄緑の三羽の姿

じっとしていると

分からない

小舟を漕ぎだすと
波立つ緑の海

眼にやさしい

幸せの一時

③

さあ、出かけよつと！

あれ？

ファンデーションが

テーブルの上に

鏡を見ると

いつもの顔が映っている

ファンデーションを

塗るのを忘れた！

鏡よ 鏡

世界中で

一番

化粧映えのしないのは
だれ？

シー……

④

新しいスマホは

多感症

触れてもいないのに

敏感に反応する

エッ！

わたしの指は電波塔？

⑤

「秋田産なし」

ない？

ないものを広告するなんて

アホかいな

あ！

梨

アホなのは

それは

わたしです

⑥

春は花粉まみれ

夏は汗まみれ

秋は食欲まみれ

冬は雪寄せまみれ

一年中雨の日は

詩まみれの矢代レイです

【あとがき】

十月上旬、元秋田県現代詩人協会会員の小峯秀夫さんが亡くなられた。お嬢さんからの突然のお知らせに呆然自失。九十歳でした。ありし日のお姿を思い浮かべるにつれ、哀しみに沈んだ。

思い起こせば、詩人協会の懇親会で隣の席になり、へどうしたら長い文章が書けますか?と、質問した。これが最初の会話と記憶している。

『ピタインダウン』を創刊して以来、毎号送らせていただいた。その都度、小峯さんから読後感を頂戴するようになった。感想は志気を鼓舞する内容が多かったが、時には辛口の批評もあった。それゆえに眼識のある批評に惹かれ、尊敬の念を抱くようになった。

〈なにかが真実〉であるのか、〈詩が語る〉ものはないかをしつかり見極めていらつしやった。〈作品を見る眼〉は、案にたがわず正直でまっすぐだ

った。ひとりでも理解者がいることは心強く、前途に一筋の光明を見いだす思いだった。

『ピタインダウン』第44号の読後感であるが、「読むほどに玉稿の発熱量が高まり、小生から遠ざかるものを感じます。／……／。一種晴々しく再読させるすごさでしょうネ。面目躍如を祈って止みません」と。

その後、しばらくしてからでしょうか。病を患われたのは――。

小峯秀夫さん、お教えいただいた多くのことを糧に、日々精進して参ります。今までありがとうございます。

どうぞ安らかにお休みください。

合掌

